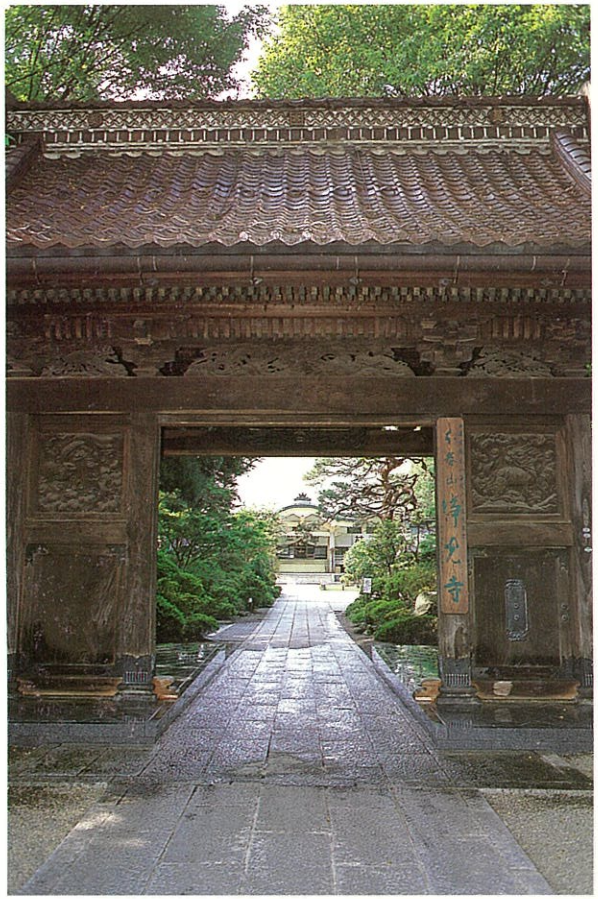
日蓮宗　身延山直末

本眷山

浄光寺

最上義光公創建
開山天正六年（1578）

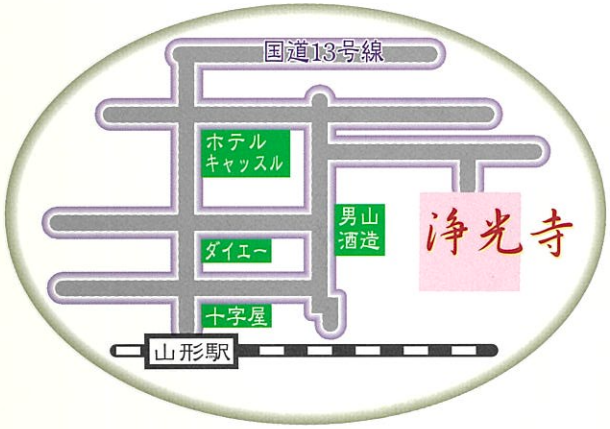


《浄光寺年中行事》

一、新年聖祷会　一月一日・二日
一、春季彼岸会　三月中
一、長栄威徳天大祭　五月二十二日
一、孟蘭盆会施餓鬼法要　八月中
一、秋季彼岸会　九月中
一、宗祖御会式　十月中
一、星祭祈祷会　十一月中

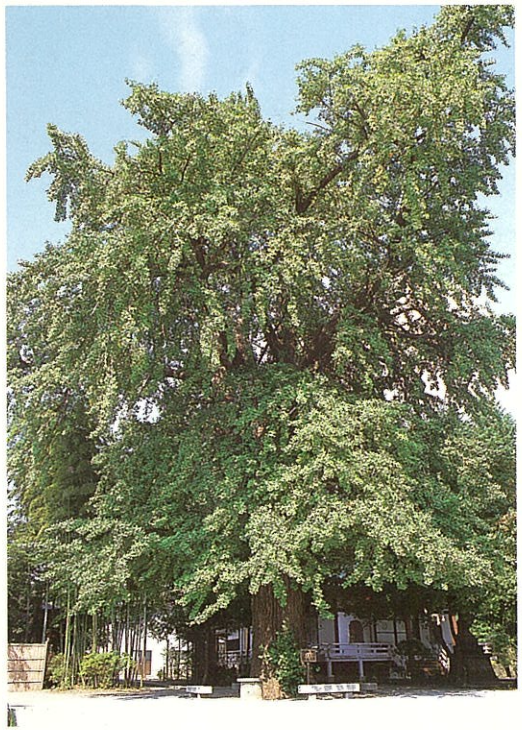
毎月十三日修行会（お講）
（読誦・唱題・講話・写経等）
午前十一時

毎月二十一日長栄講逮夜
午後七時



本眷山浄光寺
〒990-0037
山形県山形市八日町二丁目四番三五号
電話 023-622-6010

樹齢六百年の大銀杏
（山形市保存樹）



ついで正之は、城南の八日町に普光山本眷寺という境内地一万坪の法華寺院があることを知った。行ってみると、門前町に面した山門のうちに樹齢二百年を優に越えたと見られる大銀杏が亭々とそびえ立ち、大本堂も十間（十八・二メートル）四方堂々たる寺院だった。

法華宗ならば、と考えた正之は、高遠浄光寺の日遵上人にすぐ連絡。この寺を本眷山浄光寺と改称して浄光院のあらたなる位牌所とし、日遵を住職に迎えることにしてやっと晴れやかな気分になった。

〈文藝春秋刊　中村　彰彦著
『名君の碑』より抜粋〉

《浄光寺の縁起と沿革》

当山は、本眷山浄光寺と称し遠く天正六年（1578）の創立で日蓮宗中本寺である。開山は日満上人、開基は城主出羽守最上義光公である。

そもそも顕本法華宗の開祖玄妙院日什大正師の創立である、会津妙法寺（現在顕本法華宗別格本山）の第五世日満上人は法弟にあとをゆずり、毘沙門天王を奉持し北方弘教を発意、山形城外の吉原村に法喜庵を結び此の地にはじめて法華経を広めたのである。学徳高く法力優れた上人の弘教は四方遠近に広まり、望んで帰依渇仰するもの多く、その名声は城下にも及んだ。その頃城主の父君義守公病重く、名医の薬石も効なく命旦夕に迫り城主をはじめ一族老臣の心痛一方ならず、人事を尽くしてその効なければ神仏の冥助を仰ぐより外なしと決意し、法力すぐれた日満上人に病の平愈を請われたのである。

その結果、霊顕あらたかにその病快愈、城主義光公大いに喜びその報恩のため、城内の現在地に一万坪の寺地を与え、一大伽藍を寄進し妙法山法華寺と号したのが当山の創立である。

その後日什門下幕府の弾圧にあう。熟義の結果その動揺を懸念し格式高い江戸谷中瑞輪寺第六世、高徳の日桂上人を当山第二世として迎え、普光山本眷寺と改称身延山直末となった。

最上家の没落により寛永十三年二代将軍秀忠の第三子保科正之公（松平肥後守）高遠（信濃国）より城主として栄転入部、当山を母お静方（浄光院殿法紹日恵大姉）の霊牌所と定めた。高遠より日遵上人を迎え当山の第四世となし、母の法号にちなみ、寺号を本眷山浄光寺と三度改称し今日に至っている。

当山には、正之公拝領の葵緋紋白五條袈裟や同紋重箱等が現存するのも、その故である。





浄光寺寺紋



この紋は葵くずしという紋で正之公は二代将軍秀忠公の御落胤という立場から自らを謙って三葉葵の紋ではなくこの紋を用いたと伝わる



日満上人奉持
毘沙門尊天像
（有形文化財指定）



保科正之公拝領の袈裟と重箱

浄光院への哀傷歌（保科正之作）
まことにもくるる夜ごとに野辺にふせる
枕のもとのくさの露けき